

「量り売り致し口」といふ貼り紙も黄ばみて村の酒屋閉ぢたり

歌集『龍』(2019・10月号)に載っていた谷本史子さん(笠岡市在住)の秀作である。

さまざまな情景を思い描くことができる。そこでの「量り売り」のその一は、小売りである。

儀流のシニア

神崎 宣武

樽のダボス(下方の取り出し口)の栓を抜いて杓に酒を注いで量る。それを銘々が持参した容器に移して持ち帰る。戦後(第2次大戦後)しばらくまでは、

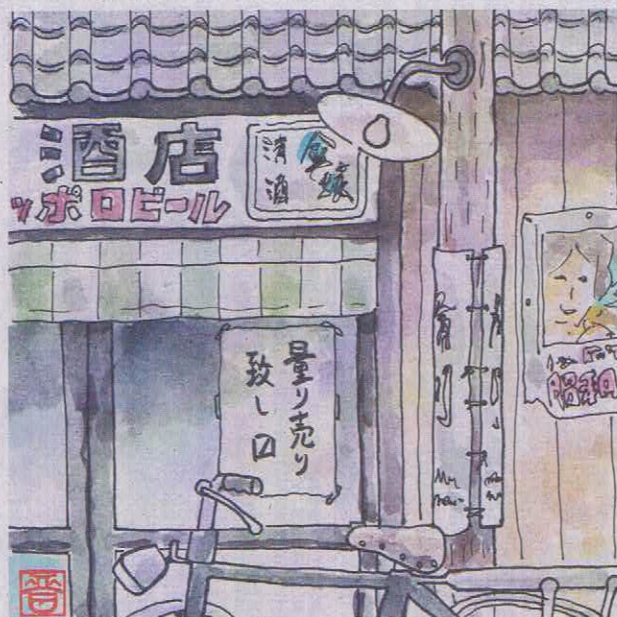
そうした光景がみられたものだ。もちろん、瓶売りもあったが、その時どきの量り売り、すなわち消費者にとっての小口買いが存続していたのである。そ

のことは、内田百閒(岡山市出身)の『百鬼園戦後日記』などで知ることができる。

それ以前の量り売りでは、

が十分に普及するまでの間、重用された。酒造元が所有するものが多かったが、販売店の所有するものもあった。そ

量り売り



世は歌につれ酒につれ

番まで卸したかを記帳しておいて、あとでそれを回収するのだ。販売店では、それを満たして小売りもするが、量り売りの容器にも使った。いづれにしても、番号を控えての回収容器であった。戦後は、そうした貧乏徳利の実用が後退した。回収がされないまま、あちこちに捨てられ、あらぬところに残ることにもなった。

余談になるが、テレビの時代劇では、無頼の徒などがそうした貧乏徳利から酒を注いで飲む場面がでてくる。が、貧乏徳利は、化学釉薬や電話番号からもわかるように近代の所産。時代考証の誤り、というしかない。私は、そうした貧乏徳利に対して特別な思いがある。かつて、それを収集して歩いたのだ。昭和40年代のこと、その数は千点を超えようか。民俗学者の宮

陶磁器の徳利が広く用いられていた。俗に貧乏徳利とか通るものもある。電話番号が記されているものもある。酒造元ではそれに酒を満たして卸す。どこに何番から何

本常一(1907〜81年)から、「モノに数多く当たって、生活者の合理を考えよ」と命じられた結果だが、それにしてもわれながらよく集めたものだ、と

歳の暮こはがまんの年賀酒されどもちよっと毒味酒(宣武)

(民俗学者) 11月1回掲載